

フロントランナー

編集者・白石正明さん

ケアの可能性広げるキラーパス

2018年4月28日（日）朝日新聞 Be



書店では、暮らしや哲学の本のコーナーに置かれることも。熱心な読者は女性のほうが多い
＝東京都杉並区の「Title」

一体どこに起点があるのか。そんなキラーパスを次々送り出す、名物編集者である。

たとえば、脳性まひの小児科医がリハビリで得た官能の記憶。他力本願な“弱い”ロボット。治るのをあきらめた作家の躁鬱日記。月夜の晩に体がざわめく発達障害の当事者研究。難病で動けない母親を「蘭の花のように」看病した記録――。

『シリーズ ケアをひらく』（医学書院）は30冊超。足かけ19年、たった一人で、予定調和とは無縁の本作りに挑む。

「ケアって、心とからだ、人間関係、生の営み全体のプロセスにかかわるものです。あいまいで微妙で、言葉にされてないことも多い。だから逆に広々と自由で、いろんな方向へ企画が広がっていった」

執筆陣は中井久夫、上野千鶴子、内田樹、坂口恭平の各氏ら著名な文化人から、初めて本を出す新人まで多彩だ。

そうした中から新潮ドキュメント賞、大宅壮一ノンフィクション賞などの受賞も相次ぎ、名伯楽と目されてきた。

『中動態の世界』で昨年、小林秀雄賞を受けた哲学者の國分功一郎さんが力を込める。

「強い指示や介入もなければ、寄り添った親身な支援もない。まさに能動でも受動でもない『中動態』の距離感。サークル仲間のようにいて、気づいたら原稿の話が始まっている。あ、編集者だったんだ、と」

確かに、とらえどころがない。面白がりによく笑い、でも控えめ、遠いまなざしの人。

本人によれば、編集者とは、著者の話し相手になり、問いを投げかける役割だという。問いのサイクルを作れば、おのずと舞台が回っていく。

ただ、それだけで話題作は生まれない。イメージするのは東インド会社だ、と跳躍する。

「海を越え、紅茶を英国へ運んだ。移動だけで商品の価値を高めたわけですよ。編集者も、作品をまったく違う文脈に置くことで、輝かせたい」

本作りの仕事に就いたのは30代前半と、遅いほうだ。最初に勤めた福祉系の出版社では、東京の編集部門に配属されず、9年間、岐阜で校正などを担当した。後輩に先を越される悲哀も味わい、鬱々としていた。

軽い吃音（きつおん）がある。社交的で、傍目（はため）には問題ないのに、常に緊張と不安にかられていた。

普通のことを普通にする。それがいかに難しいか。奇跡に近いのか。ケアの本を編み、著者の葛藤に耳を傾けながら、そんな思いをめぐらすのは、「そぐわなさ」の感覚を、いまも心の底に秘めているから。

遠いまなざしはおそらく、自身に、そして次に著者を連れ出す大海原へと向けられている。

「違和感と問いが渦巻いている人は書ける」



國分功一郎さん（奥）と小児科医・熊谷晋一郎さん、当事者研究者の綾屋紗月さんとの打ち合わせで

——ケアへの関心は、いつごろからですか。

もう四半世紀前になります。前の会社でようやく編集者になることができ、看護関係者と仕事でつきあうようになりました。

新鮮でしたね。ベッドサイドに立つ人たちというのは、電車内で急病人が出たら、迷いなく手を差し伸べられる。駆けつけて必死に働く。人として高級で、格が違うと感嘆しました。

自分にはそんな勇氣はない。若いころは頭でっかちがイヤで肉体労働のバイトばかりしたのに、何も身につけていないと恥ずかしくなりました。

——「格」の差だと。

そう思います。ケアの人たちって、全然けち臭くないんです。圧倒的な贈与の世界に生きている。贈与というと一方的に与えているように聞こえますが、逆にたくさんの何かをもらっているという感覚も、同時に持っている。謙虚なんです。そういう人間の大きさに、やられました。

でも、それが十分には理解も評価もされていない。

■別のモノサシで

——なぜでしょう。

専門職であれば医者と看護師の序列とか、家庭であれば女性の地位の問題なども大きいと思いますが、言葉にしにくいがゆえに、ケアをめぐる語りがあまりに貧相だった点もあるのでは。「愛」「絆」のような紋切り型で単純化されて。

でもそれは、発信側じゃなくて、受け取る側の問題だと思いました。既成の価値の枠組みで理解しようとする相手には伝わらないから、どうしてもわかりやすい言い方になってしまう。

そんな不公正への疑問が、ケアとは何なのか、できるだけ多様な方向から語るシリーズを始めた動機の一つです。

——長期になりましたが、節目の一冊は？

2002年の『べてるの家の「非」援助論』でしょうか。べてるの家は北海道浦河町の精神障害者のコミュニティで、「精神病で町おこし」をうたいます。

ソーシャルワーカーの向谷地生良（むかいやちいくよし）さんが発案し、幻覚や妄想を無理に治そうとせず、コミュニケーションの道具として生かす。別のモノサシでやってみよう、という提案です。

精神医学をめぐるっては、肯定・否定の双方が対立してきた歴史がありますが、第三の道を行く。べてるの試みは、結果として回復に近づいているんですね。

僕の「編集者＝東インド会社」論も、彼らの試みが教えてくれたことです。

——新しい書き手と、多くの仕事をしてきました。依頼の決め手は何ですか。

この社会の現実への違和感があるかどうか、ですね。問いが渦巻いている人は書ける。エネルギーがわき出ていますから。

最初から、ぴんとくる人もいれば、書いたものはわかりにくくても会って話をすると、いけると思うこともあります。

■欠落感にひかれ

——会って話すことは、大切ですか。

はい、忙しいベテランの著者でも、できるだけ会う時間を作ってもらいます。

僕ね、切迫した状況を真剣にしゃべるのを見るのが好きなんです。もしかしたら、話の中身よりも。

えらい先生でも、一皮むけば切実な問題を抱える。弱くダメな部分や欠落感がある。僕はなぜかそこに引き込まれてしまい、つながりのきっかけになる。

サッカーを例に出すと、わかりやすいでしょう。スペースがあるからこそアシストが生まれ、ゴールが実現する。編集という共同作業は、著者とのあいだに入り込むスペースが、より重要といえるかもしれない。

——新刊が出てはすぐに消えていく出版界で、ロングセラーが多いですね。

初版5千部ほどで始め、10年、15年とじわじわ売れ続けているものが多いです。5万部を超える例はめったにありません。賞をいただいたからといって、すごく売れるわけではない。

でも5千人のものの見方が変わるなら、すごいと思いませんか。情報は見方を変えないけど、本は変えてくれると信じています。

ただ、売れるための努力を軽んじてはいけません。というか、本を作っていて、そこが一番好きです。

装丁は気を使います。重い題材こそ軽やかに見せたいですね。帯文も工夫のしどころ。著者とのあいだで悦に入るより、営業の人に無理やり書かされたようなテイストのほうが風通しのいい本になると思います。

——今月、定年で嘱託社員になりました。

仕事をやめるという考えは浮かびませんでした。オフとの区別がないし、積み残しもたくさんあって。

次の本は、伊藤亜紗さん『どもる体』。吃音（きつおん）です。しゃべろうと思うと、しゃべれない。「隠れ吃音」の一人として、面白がりながら編集しました。

自分のことは自分が最もわからない。「ケア」シリーズでも柱の一つである、当事者研究のポイントを、かみしめています。

■プロフィール

★1958年、東京生まれ。東武東上線沿線で育つ。近くの米軍宿舎の広い芝生で野球とサッカーを。「MP（軍憲兵）に捕まったら撃ち殺されると、必死に逃げた（笑）。昭和の子供でした」

★中学時代に好きだった作家は北杜夫。高校はサッカー部。ハーフ（現在のMF）で活躍。

★76年、青山学院大法学部入学。ルポルタージュを愛読。肉体労働のバイトはこのころ。

★81年、福祉関係の出版社に入り岐阜へ。校正の仕事を終えた後は、サッカーが日課＝写真。

★90年、東京の編集部門に。『口から食べる』は思い出の一冊。

★96年、医学書院入社。看護実務書を編集するかたわら、2000年から「シリーズ ケアをひらく」をスタート。



★家族は岐阜で同僚だった妻と娘2人。「女性3人に教わったのは『結論よりプロセスが大事』。ケアを考える上でも至言だと思っています」

（文・藤生京子、写真・北村玲奈）